

オックスフォード大学
REES センター

里親養育におけるスーパーバイズ・ソーシャルワーカー の役割

国際的な文献レビュー

ヘレン・コシス・ブラウン、ジュディ・セバ、ニッキー・ルーク

謝辞

初期の草稿に寄せられた、Estella Abraham、Alison Alexander、Richard Brandford、Jason Brown 教授、Cinzia Canali 博士、Wayne Ferguson、Bob Flynn 教授、Gabrielle Jerome、Sara McLean 博士、Sally Melbourne、Ian Sinclair 教授、Tiziano Vecchiato 博士のコメントに感謝致します。

最終版の文章に対する責任は著者にある。

Helen Cosis Brown, Judy Sebba and Nikki Luke

Rees Centre for Research in Fostering and Education

University of Oxford

(リース里親養育および教育研究センター)

(オックスフォード大学)

2014年9月

© 2014 Rees Centre. 不許複製・禁無断転載

ISBN : 978-0-9929071-0-5

eISBN : 978-0-9929071-1-2

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 *The role of the supervising social worker in foster care. An international literature review (2014)* を日本語訳したものです。日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた中村豪志氏、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長 上鹿渡和宏

目次

| | |
|-------------------|----|
| • 要旨 | 4 |
| 主な知見 | 5 |
| 政策と実践のための提言 | 6 |
| 今後の研究のための提言 | 6 |
| • 本文 | 7 |
| レビューの背景 | 7 |
| 目的と範囲 | 9 |
| 方法論 | 9 |
| 研究の状況 | 10 |
| 主な知見 | 10 |
| 現在の研究エビデンス基盤のギャップ | 19 |
| 結論 | 20 |
| 政策と実践のための提言 | 21 |
| 今後の研究のための提言 | 22 |
| • 参考文献 | 23 |
| • 付録A | 26 |

要旨

里親は、家庭を基盤とした里子の養育を行う上で中心的な役割を担っている。安心、安定性、愛、強いアイデンティティと帰属意識を与えるような方法で、里親が里子の世話をできるようにし、発展、支援されるためには、里親自身が感情的にも実践的にも、専門的に支援されることが必要である。

この文献レビューは「ソーシャルワーク支援」、特にその支援とスーパービジョンを提供する際のスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に焦点を当てている。この文献レビューの目的において、我々が「スーパーバイズ・ソーシャルワーカー」（世界中の他の多くの用語でも知られている）と呼ぶ、里親に対して支援とスーパービジョンを提供するワーカーの個別の役割は、比較的最近に発展してきたものである。里親養育の専門化と並行して、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの関係性と責務についての見解が変わり、里親養育サービスのスーパービジョンと精査の基準が導入された。

里親支援ソーシャルワークの役割に対する期待は、里親養育サービスの基準 21：英国における国家最低基準（教育省、2011）に定められている。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーは、里親養育家庭と里親養育サービスとの間のパイプ役であり、里子のソーシャルワーカーの役割とは異なるものである。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割は、里親との協働における支援とスーパービジョン、両方の側面を含むため複雑である。

例えば、子どもを保護する問題が里子のソーシャルワーカーによって提起された場合、里親とそのスーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係においてはスーパーバイズの¹関係がより顕著になるが、里親が家族との死別を経験した場合には、支援的關係が強くなるだろう。里親は、この関係が彼らにとって非常に重要であると一貫して報告しており、この関係が養育者の募集（潜在的な養育者が、どのような支援を受けることができるかと考える点で）と定着の要因であることが示されている（Sebba, 2012）。それゆえ、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割が研究や学術的な注目をほとんど集めていないことは興味深いことである。これはおそらく、十分に確立された里親支援ソーシャルワークのモデルがないためであろう。

この国際的な研究のレビューでは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割を取り上げている。里親養育について、家族や友人（親族）による里親養育を含む、広い意味で検討する。レビューは、以下の3つの質問を検討するために行われた：

- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとは何をするのか、そして里親に提供されるスーパービジョンと支援の構成要素とは何か。
- ソーシャルワーカーが里親を効果的にスーパーバイズするためには何が必要か？
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーによって里親に提供される支援とスーパーバイズの質と量は、里子に対する成果、委託の安定性、里親の継続に影響を与えるか？

電子データベースとウェブサイトを用いて、英国、米国、カナダ、オーストラリアの22件の研究（関連論文24編）を確認した。国をまたいで比較は、文化やサービスの違いによる制約を受ける。レビューのために確認された研究は1996年以降に出版されたもので、すべて英語で執筆されたものである。22件の研究のうち14件が里親の認識のみに焦点を当てており、他の研究ではソーシャルワーカー、ケースワーカー、里親家庭リソースワーカー、里親養育サービス管理者、そして1件の研究では通常²の里親に加えて若者に焦点を当てている。

それぞれの研究では、インデプスインタビューやフォーカスグループから、アンケートを使用した大規模な調査まで、さまざまな方法論が用いられていた。研究のサンプル数は7～約2000人の範囲で、サンプル数30人未満のデータに基づく報告の研究は5件のみであった。レビューでは、比較群または対照群を用いた評価の対象となる、介入を含む研究は確認されなかった。

ほとんどの研究では、レトロスペクティブ（後ろ向き）な方法論を採用している。

¹ 本報告書での「スーパーバイズの」は、「支援的」と対比して「管理的・監督的」として解釈される。

主な知見

これまでの文献では、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割として、里親との関係でスーパーバイズの性質よりも支援的要素がより注目されてきた。エビデンスの基盤には、主に里親の視点からこの関係を調査した研究が含まれているが、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーや里親支援提供者の認識については比較的注目度が低い。さらに、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里親の関係が、委託の安定性や子どもへの成果に与える影響については、ほとんど注目されていない。結論としては、子どもの福祉と保護が優先されなければならない。

全体的に里親は、里親養育サービスとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーから提供される支援を好意的に評価している。より実践的な要素と並んで、感情的な支援が高く評価された。養育者は、申し立てや里親委託の中断の場合など、特に重大局面にある場合やストレスのある時に対応可能な、信頼できるソーシャルワーカーを高く評価していた。交流の度合いは、主に里親養育サービス側の関心を示すものとして経験されている。

電話連絡だけでなく、家庭訪問も好意的に評価された。里親は、里子と実親家族との課題のある交流に関する支援を高く評価していた。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが手配したレスパイトは、一部の里親にとっては支援的であると考えられていた。多くの里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの仕事量はその利用可能性に影響を与えていると考えていたが、仕事量に関するデータを報告した研究はなかった。スーパーバイズ・ソーシャルワーカー側の視点を報告する研究は限られていたが、記録、規制、コンプライアンスの増加によって彼らの仕事量のバランスが変化したことは間違いないだろう（例：Sellick, 2013）。

里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーは、「子どもを取り巻くチーム」の一員として、里子のための計画と意思決定、および里子のケアプランの実現に向けて、委託実施当局を支えている。里親は、里子に関する決定と計画に参加したいという希望、さらには里親から里子への愛情と里子から里親への愛着は、子どもの将来を計画する際に考慮に入れるべきであると主張した。里親が専門職ネットワークの中でどのように見られているのか、つまり、里親が同僚として見られているのか、一緒に仕事をしているのか、という点で緊張感が生じている。

里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーから信頼され、尊重され、大切にされることを望んでいた。共同の研修は、里親をチームに含めるための手段であると考えている人もいた。里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの効果的な対人コミュニケーションを好意的に評価したが、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーは里親の行動を定期的に調査し、説明する責任を持っているため、力の不均衡が残っていることを認識しておく必要がある。

里親もまた、自身への委託が検討されている将来の子どもたちや、現在の里子について、可能な限り多くの情報を望んでいた。

里親はまた、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里子を知っていることや、里親者が問題行動への対応を支援するための彼らの助言を好意的に評価した。

このレビューから導き出されるその他の結論は以下の通りである。

- ・里親は一般的に、里子のソーシャルワーカーとの協力関係よりも、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの協力関係について、肯定的な見方をしていた。養育者が、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーがうまく連携していると感じた場合、これは有用であると認識された。
- ・ソーシャルワークの教育と研修においては、家族の委託と体系的な実践をカバーする里親養育を、里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの両方が適切に行うために、里親養育にもっと明確に焦点を当てる必要があると考えられていた。
- ・委託の中断には様々な要因があると考えられていた。ある研究では、里親委託への支援は委託の安定性と関連していたが (Tregeagle, Cox, Forbes, Humphreys and O'Neill, 2011)、別の研究では関連していなかった (Taylor and McQuillan, 2014)。
- ・独立型里親養育サービスと公的里親養育サービスの間には、いくつかの違いが指摘された。独立型里親養育セクターの里親は、特に十分支援されていると感じていた。

- ・スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのスーパービジョンは、ソーシャルワーカーの態度が意思決定に影響を与えないよう意識するため、彼らの個人的態度について考慮する必要があると報告された。
- ・多くの研究において、里親の継続は、一般に里親が受けた支援、特にスーパーバイズ・ソーシャルワーカーによる支援の質と量に関連していると報告された。

政策と実践のための提言

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関する研究エビデンスが限定的であることを考えると、提言は暫定的なものである。

- ・里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係を好意的に評価している。したがって、里親養育サービスは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親と直接的に協働できるための利用可能性を確保するようにケース数の管理を行い、ソーシャルワーカーの効果を高めるようなスーパービジョンを行うべきである。
- ・英国における国家最低基準を超える実践ガイダンスには、時に里親との関係に葛藤を抱える側面も含めて、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割への期待を含める必要がある。
- ・里親が支援計画において個人的および専門的に成長することにおける、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割の可能性は、さらに認識される必要がある。
- ・公的および独立型里親養育サービスは、共同研修などの具体的な活動を通じて、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里子のソーシャルワーカー、里親間の協力関係をより強化する方法を検討していく必要がある。
- ・ソーシャルワークの教育と研修には、里親養育に関連した知識と技術の発展を含める必要がある。

今後の研究のための提言

このレビューでは、上記の既存の研究エビデンスにおけるいくつかのギャップと弱点が確認された。以下のような、さらなる研究を行うことを提言する：

- ・スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に何が含まれるか、ケース数の管理を含むスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの日常業務、そして彼らの里親養育サービス内で、他の機関や専門家に関して、そして里親、里子、里親家族との直接的な仕事において、義務付けられていることは何か、また裁量が残されているのは何かを、特定してマッピングする。
- ・スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの視点を含める。
- ・里親および里子に対するスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの介入の有効性を、特に委託の安定性と里親養育経験の質に関連して検討する。
- ・特定の介入モデルと理論的枠組みに基づいた場合に、里親養育サービスとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが、里親と里子の成果に有益な違いをもたらすかどうかを、比較グループによるプロスペクティブ（前向き）研究デザインを用いて検証する。
- ・スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーの間の協力関係の質を調査し、特に申し立ての管理、委託の中断、委託の安定性に関して、彼らの関係におけるどの側面が、里親と里子の経験に違いをもたらすかを明らかにする。
- ・スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの支援とスーパービジョンの有用性に関して、人種的マイノリティーや先住民族の里親、健康上の問題を抱える里親、および彼らのスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが経験し認識していることに注目する。

レビューの背景

里親養育が主題となっている。公的養護下の子どもたちのかなりの割合が里親に預けられており、子ども達の里親養育委託の数、質、安定性を確保することは、里子たちに対する責任を負う者の重要な責務であることから、この問題は重要である。子どもたちのための委託の安定性と持続性は、何十年にもわたって関心を持たれてきた。2013年に英国を背景として再検討したところ：「調査の結果、『養育システム』が多くの子どもや家族に対して失敗を繰り返していること、そしてこの問題への取り組みがますます緊急であり、新たなアプローチが必要であることは間違いない。」（『養育調査』、2013、p. 2）。

同じ調査報告書では続けて、子どもたちが国家によって養育される際には、「安全、安定性、愛、強いアイデンティティと帰属意識」（2013、p. 7）が必要であると述べている。里親は、主に過去に問題を抱えたことがあり、時には動揺して扱いにくい行動につながることもある里子のために、家庭を基盤とした養育を提供する上で中心的な役割を果たしている。「安心、安定性、愛、強いアイデンティティと帰属意識」を与えるような方法で、里親が里子の世話をできるようにし、発展、支援されるためには、里親自身が感情的にも実際的にも、専門的に支援されることが必要である。Sinclair（2005）は、里親を支援するサービスの提供を促進するための8つの中心的要素、すなわち、財政面、訓練と準備、養育者グループ、ソーシャルワーク支援、夜間勤務チーム、短期休暇、委託の準備、およびチームワークが確認された。この文献レビューの焦点は「ソーシャルワーク支援」にあり、特に支援およびスーパーバイズを提供する際のスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に焦点を当てている。

この文献レビューの目的において、我々が「スーパーバイズ・ソーシャルワーカー」（世界中の他の多くの用語でも知られている、例えばカナダの「里親家庭リソースワーカー」；Brown, Rodgers and Anderson, 2014）と呼ぶ、里親に対するスーパービジョンと支援を提供するワーカーの個別の役割は、比較的最近に発展してきたものである。英国では、里親支援ソーシャルワークの役割に対する期待は、里親養育サービスの基準 21：英国における国家最低基準（教育省、2011）に定められている。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーは、スーパービジョンと支援の両方を提供し、里親養育家庭と里親養育サービスの間のパイプ役であり、里子のソーシャルワーカーの役割とは異なる。里親と協力するソーシャルワーカーおよび里子のソーシャルワーカーのこのような役割の分離は、1990年代までに多くの国で一般的になっているようである（Sellick, 1999）。したがって、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割が研究や学術的な注目をほとんど集めていないことは興味深いことである。

過去30年以上にわたり、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーは研究において周縁的なものとして考えられ、主にはその役割に対する里親の認識を通して、里親養育の別の側面に焦点が置かれた研究の知見に埋もれた形であった（Aldgate and Bradley, 1999；Biehal, Ellison, Baker and Sinclair, 2010；Farmer, Moyers and Lipscombe, 2004；McSherry, Malet and Weatherall, 2013；Rowe, Cain, Hundleby and Keane, 1984；Schofield and Ward with Warman, Simmonds and Butler, 2008；Sinclair, Wilson and Gibbs, 2005；Wade, Sirriyeh, Kohli and Simmonds, 2012）。ソーシャルワークの実践者を対象としたいくつかの論文（Collis, 1999；Lawson, 2011）や学術的な議論を呼んだ論文（Brownら、2014；Caw with Sebba, 2014；Fulcher and McGladdery, 2011；Sellick, 1999；Triseliotis, Sellick and Short, 1995）は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割の、支援的要素とともにスーパーバイズの要素をより直接的に取り上げた。Lawsonは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーによる里親のスーパービジョンに必要な要素を次のように考えていることを明らかにした：

「情報・助言・指導の提供、実践的で感情的な支援ニーズの確認、養育の基準の確認、コメントや懸念・申し立てへの対応、方針や手順の遵守、家庭での重要な出来事や変化の記録、リスク・健康・安全性の管理とより安全な養育の確保、委託対象の各子どもの養育計画の実施状況の確認、里親養育の家庭への影響のモニタリング

グ、養育者のフィードバックや心配事への対応、学習や発達ニーズの確認と支援、現在および将来の資源の利用状況の確認、支払いや設備の確認、記録の確認、里親委託された子どもと養育者との関係の確認」(2011、p. 37)。

役割の複雑さについては、里親とともに仕事において支援とスーパービジョンの両方の側面を持っていると言及されており、異なる場面で様々な側面が前面に出される可能性がある (Brown ら、2014 ; Fulcher and McGladdery, 2011 ; Wires, 1954)。例えば、養育基準や児童保護の問題が里子のソーシャルワーカーによって提起された場合、里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係においてはスーパーバイズの性質がより顕著になる。英国の背景では、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー (SSW) の役割に関する政府ガイダンスは、この関係のスーパーバイズの性質を次のように強調している。「SSW の役割は、里親の仕事をスーパーバイズして、里親が子どものニーズを満たしていることを確認し、里親の実行状況の評価し、スキルを伸ばすための支援と枠組みを提供することである。」(英国政府、2011、p. 51) スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里親の関係のスーパーバイズの性質に焦点を当てることは、支援の要素がより重要視されている研究文献ではあまり目立ったものではないように思われる。里親養育が行われる経済的・組織的背景は、里親養育サービスが里親に提供する支援やスーパービジョンの内容や、それに対する認識に影響を与える可能性がある。ソーシャルワークスタッフの離職率の高さは、里親養育サービスやスーパーバイズ・ソーシャルワーカーにどのように支援されているかという里親の経験に影響を与える要因として指摘されている (Chipungu and Bent-Goodley, 2004 ; Claiborne, Auerbach, Lawrence, Liu, McGowna, Fernandes and Magnano, 2011)。受ける支援の質に関する里親の認識は、その定着に関係していると思われる変数のひとつである (Wilson, Sinclair, Taylor, Pithouse and Sellick, 2004)。さらに、「既存の里親が里親養育を検討している人に与える影響も重要である」 (Sebba, 2012、p. 9) ことを考えると、里親養育サービスから受ける支援やスーパービジョンの質に関する里親の見解は、里親の継続だけでなく、募集にも関連している (Cox, Buehler and Orme, 2002)。ソーシャルワーク支援についての里親の認識を含む研究レビューは、全体的に里親がスーパーバイズ・ソーシャルワーカーから受ける支援を好意的に評価していることを示している (Berridge, 1997 ; Sellick, Thoburn and Philpot, 2004 ; Wilson ら、2004 ; Sinclair, 2005)。これは、里親の募集と定着に関連して重要であり、これらはどちらも里親養育サービスに必要な事項である。ソーシャルワーク支援は、里子の実親家族との交流など、里親がストレスを感じる可能性のある問題については、特に好意的に評価されている (Austerberry, Stanley, Larkins, Ridley, Farrelly, Manthorpe and Hussein, 2013)。しかし、研修に関する分野など、里親の満足度の他の分野を考えた場合、高い満足度が指摘されている場合もあるが、それが必ずしも里子への成果向上に結びついているとは限らない (Pithouse, Young and Butler, 2002 ; Wilson ら、2004)。2つの調査研究によると、里親の研修は、一貫した理論的方向性に関連付けられ、専門チームによって数週間にわたって提供される場合、ペアレンティング戦略の質および子どもの成果の両方に有益な効果をもたらす可能性があるとして報告されたことが示された。例として、英国の Fostering Changes 12 週間研修プログラム (Briskman, Castle, Blackeby, Bengo, Slack, Stebbens, Leaver and Scott, 2012) や米国の KEEP 16 週間プログラム (Price, Chamberlain, Landsverk and Reid, 2009) がある。

これらの里親の研修と能力開発プログラムは、より一般的なソーシャルワークや社会的養育において、有用なスーパービジョンの必要な要素であると指摘されている特定の理論的アプローチに基づいている (Hawkins and Shohet, 2012 ; Wonnacott, 2012)。しかし、里親の実践が一貫した理論的立場から生まれたものであれば、実践が改善される可能性は高いと思われるが、それを検証するためにはさらなる研究が必要である。

特定の理論的アプローチと所定のモデルに基づいて、多次元治療里親養育チームによって提供された、里親が受けた支援を評価することは、青少年プログラムのための多くの多次元治療里親養育プログラムの英語版評価で検討された要素のひとつである (Biehal ら、2012 ; Green ら、2014)。しかし、この研究では、里親に与えられた全体的な支援から、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの具体的な役割を明

らかにすることは困難であった。里親の研修と能力開発は、支援とスーパービジョンとは異なるものである。しかし、Fostering Changes と KEEP の有効性に関するこれまでの初期の知見からは、効果的なチームワーク・子どもの発達・育児に関する実証済みの知識に裏打ちされた一貫したスーパービジョンモデルは、そうでない場合よりも、里子の直接的な養育に、より有益な影響を与える可能性があると推測できる。里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーは、一貫した理論的なアプローチに基づき、合意された目標に向けて取り組む専門的なチームの一員であるという、里親養育へのチームアプローチについて記述したテキストは、里親養育のこのモデルが里親と子どもの双方にとって有用であると主張している (Caw with Sebba, 2014 ; Fulcher and McGladdery, 2011)。しかし、この主張を裏付ける確固たる研究エビデンスはまだ乏しい。もちろんこれは事実ではないことを意味するわけではない。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーによる里親への支援とスーパービジョンの質と量が、里親の満足度、募集と定着に関連する変数であるとすれば、この里親への支援とスーパービジョンが里子たちの成果と委託の安定性に与える影響についても同じことが言えるだろうか。これまでの研究レビューでは、この点についてのエビデンスは限定的であることが示されている (Sinclair, 2005)。

目的と範囲

この国際的な研究のレビューでは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割を取り上げている。このレビューでは、家族や友人（親族）による里親養育を含めた広い意味での里親養育を検討する。次の3つの質問についての検討が行われた：

- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとは何をするのか、そして里親に提供されるスーパーバイズと支援の構成要素とは何か。
- ソーシャルワーカーによる里親の効果的なスーパーバイズに寄与するものは何か？
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーによって里親に提供される支援とスーパービジョンの質と量は、里子に対する成果、委託の安定性、里親の継続に影響を与えるか？

方法論

本レビューは、里親養育におけるスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関する国際的な文献から得られた知見をまとめたものである。ASSIA、Australian Education Index、British Education Index、Campbell and Cochrane Libraries、Conference Proceedings Citation Index、ERIC、International Bibliography of Social Sciences、Medline、PsycInfo、SCOPUS、Social Care Online、Social Policy and Practice、Social Services Abstracts、Social Sciences Citation Index を含む多数の電子データベースを検索した。

以下のサイトを検索した：BAAF、C4EO、Campbell、Casey Family Programs、Chapin Hall、Department for Education、EPPI、Joanna Briggs Institute、NCB、NFER、NSPCC、Office of Planning、Research and Evaluation in Administration for Children and Families (米国)、SCIE、The Fostering Network、および What Works Clearinghouse。

使用した検索用語は次のとおりである：

“Supervising social worker*” OR “support social worker*” OR “link social worker*” OR “link worker*” OR “support worker*” OR “case worker*” OR “caseworker*”

および

“foster care” OR “foster carer*” OR “foster parent*” OR “foster famil*” OR “substitute famil*” OR “family foster home*” OR “out-of-home care” OR “looked after” OR “looked-after” OR “alternative care”。

次に、電子検索で確認された論文のタイトルと要約を、関連性についてスクリーニングした。最後に、里親養育に関するさまざまな国際的専門家に連絡を取り、電子検索で発見されなかった参考文献を提案してもらった。レビューは実証的研究に限定されているが、論議を呼んだ論文は背景、文脈、議論に役立った。特定の種類の方法論に基づいてレビューを制限したわけではない。

研究の状況

本レビューでは、1954年以降に確認された論文から24編の研究論文(22件の関連研究)を選定したが、最終的に選定されたものは1996年以降に発表されたもので、英語で記載されたものである。調査は以下の国で実施されたものであるが、文脈上の問題のため、調査結果の一部が転用できない可能性があることを認識する必要がある。

| | |
|---------|---|
| 英国 | 9 |
| 米国 | 7 |
| カナダ | 4 |
| オーストラリア | 2 |

研究には定性的方法と定量的方法の両方が含まれていた。研究の詳細は、付録A表1に記載されている。

主な知見

このレビューの知見は、里親支援ソーシャルワークの役割が置かれている組織的文脈から始まり、その役割に対する里親の認識と彼らが受けている支援へと移る。次に、レビューを行うことで浮かび上がった一連のテーマを紹介する。

上記のように、ソーシャルワーク支援に関して何が役に立つと感じるかについての里親の認識に関しては、多数の研究報告書があるが、その研究の焦点は直接的にスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割とされていたわけではなく、別の里親養育の問題である。

この論文のために検討した24編の論文(22件の研究)では、我々の研究課題に関するほとんどの知見が「里親の認識」に分類されている。「支援」と「スーパービジョン」が区別されることはほとんどなく、一部の論文では「ソーシャルワーク支援」という用語は、他のいくつかの国で実践されている複合的な役割を反映して、里子のソーシャルワーカーの役割とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割を混同して使用されており、どちらの役割が検討されているかを区別するのは困難であった。多くのテーマが重複しており、我々が構築した区別はある程度人為的なものであるが、特定の知見に必要な強調を加えることができ、関連する場合には、レビューされた論文の中の一部の資料の詳細を見ることができる。

組織的文脈

支援とスーパービジョンは、特定の国および組織的文脈の中で行われる。このレビューの特徴のひとつは、国を超えて浮かび上がってくるテーマに関する全体的な類似性であった。ただし、この知見は、公的に提供される里親養育と、このレビューの目的において我々が独立型里親養育サービスと呼ぶ、民間、慈善団体、独立セクターによって提供される里親養育との間に、いくつかの違いがあることを明らかにしている。

組織的文脈というテーマの下、我々は、公的親養育と独立型里親養育の提供、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのスーパービジョン、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの仕事量、里親養育への訪問頻度などについて違いを示した。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとは何をするのか？

スーパーバイズ・ソーシャルワーカー（カナダの里親リソースワーカー²）が実際に何をしているのかを明確に調査した研究は、Brown ら（2014）および Gleeson and Philbin（1996）の2件である。Gleeson and Philbin の研究は、親族が里親となる場合の研究であり、研究報告書の中で「ケースワーカー」の役割については、確認できる限りでは、里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割が混同されていた。これらの「ケースワーカー」が行ったことには、家族・里親・子どものための資源へのアクセス、家族・里親・子どものニーズの評価、永続的な計画の決定などが含まれる。良好な事例マネジメントと家族との関係構築が重要であることが確認された。

カナダの Brown ら（2014、ページ番号なし）による研究は、「ソーシャルワーカー」自身、この場合は「里親リソースワーカー」が何をしたかを調査した唯一のものである。彼らは、役割として、「委託の把握、当事者間のコミュニケーションの促進、コミュニケーションスキルの教示、里親養育家庭と里子のマッチング、里親の継続、チームワークの促進、委託に関する問題への対応、里親養育家族の支援、権限の行使、円滑な運営の確保」という10の側面を明らかにした。彼らの役割は里子のソーシャルワーカーと区別されていたが、養育者の資質に関する知識を活用して、子どもと養育者のマッチングに関与していた。

Tregeagle ら（2011）は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親委託の支援に費やした時間を調査したが、この論文では、里親との「交流」と里親の「事務管理」を区別する以外に、ソーシャルワーカーが何をしたかを具体的に特定しなかった。里親との「直接交流」作業は、その構成部分については検討されなかった。

Wade ら（2012）の研究では、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの訪問頻度は平均して月1回であり、Clarke（2009）の研究では4～6週間隔であった。Fisher ら（2000）は、訪問の頻度と、里親がスーパーバイズ・ソーシャルワーカーに支えられていると感じていることとの間に関係があることを発見した。ソーシャルワーカーの訪問のペースについては、Maclay, Bunce and Purves（2006）および Tregeagle ら（2011）が検討した。

Maclay らは、研究に参加した里親が時間の経過とともにソーシャルワーカーに対してより積極的になり、その結果、彼らに異議を申し立てたり、必要に応じて支援を求めたりすることができたと述べたと記述している。Tregeagle ら（2011）は、委託の初年およびより困難な委託の場合に、里親に対してより直接的なソーシャルワーカーとの交流を与えるように設計されたソーシャルワーク支援のモデルを説明している。彼らはまた、必要に応じてより高いレベルで里親養育家庭との直接交流を提供する柔軟性が必要だともコメントした。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのスーパービジョン

Wonnacott（2012）、および Hawkins and Shohet（2012）は、ソーシャルワーカーがサービス利用者や養育者と効果的に連携できるように、理論的な枠組みの中においてスーパーバイズを受けていることの重要性を強調している。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーによる有用なスーパービジョンも、ソーシャルワーカーや里親の育成に取り組む組織の中で反省的実践を含む、理論的枠組みの中に位置づけられる必要があるかもしれない（Caw with Sebba, 2014）。

このレビューにおいて、ソーシャルワーカーに対するスーパービジョンのテーマを最も深く含む研究は、Gleeson and Philbin（1996）、および Hollingsworth, Bybee, Johnson and Swick（2010）であった。ソーシャルワーカーのスーパーバイザーは、ほとんどのソーシャルワーカーが、教育や研修を通じて、家族や知人の里親養育の複雑さに対処する準備ができていないと考えていた。彼らは自分たちの限界を、法律や政策の枠組みに関する知識や、介入を強化する理論的アプローチに関するものだと考えていた。スーパーバイザーはまた、彼らの見解では、ソーシャルワーカーが家族や知人の里親と協働するための準備に「膨大な量の時間」（1996, p. 30）を費やした、と記録している。スーパーバイザーが指摘したス

² foster family resource workers と同義であり、カナダにおいて、里親に対して、スーパービジョンと支援を提供するソーシャルワーカー。

ーパービジョンのもうひとつの側面は、ソーシャルワーカーの文章スキルを重視しなければならないことであった。Gleeson and Philbin の論文では、スーパーバイザーの教育的役割が強調されており、特に個々の里親や里子についての議論を通じた臨床介入スキルの開発に関連していた。

Hollingsworth ら (2010) は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親養育の現場で活動する際に、心に留めておくべき重要な点として、ソーシャルワーカーの意見が意思決定に影響を与える可能性があること、里親養育における意思決定が研究に裏打ちされた知識に基づいて行われていることを確認する必要があること、などを挙げている。

仕事量

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの、仕事上のプレッシャーや仕事量の多さは、多くの研究で言及の対象となっていた (Rosenwald and Bronstein, 2008 ; Chuang, Wells, Green and Reiter, 2011 ; Maclay ら, 2006)。Maclay らおよび Rosenwald and Bronstein の研究では、里親が、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのケース数の多さを、本来あるべきようには対応できない理由であると考えていた。

独立型里親養育サービスと公的里親養育サービスの違い

このレビューでは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割について、公的里親養育と独立型里親養育の間で多くの違いがあることが明らかになった。

上述したように、Tregeagle ら (2011) の研究は、ソーシャルワーク支援介入モデルを用いてオーストラリアの NGO 内で行われた。これは、里親への訪問頻度が、委託の期間とその複雑さに応じて計画されたことを意味していた。里親養育家庭への計画的な訪問のパターンは、委託の中断の可能性を減らすと考えられていた。

Kirton, Beecham and Ogilvie (2007) の研究では、独立型里親養育サービスの里親は、公的里親養育サービスの里親よりも全体的により好意的に評価されていると感じていた。Wade ら (2012) は、独立型里親養育サービスを利用している里親のほとんどが、一般的には十分な支援を受けていると感じていることを明らかにした。これらの知見は、Okeke (2003) 以外の他の研究では、里親養育サービスが独立型か公的なものかにかかわらず、全体的に大多数の里親が支援されていると感じていたことがわかっている (Clarke, 2009) ことと照らし合わせる必要がある。

Kirton らの調査結果は、独立部門と公的部門の里親が、自分たちの話を聞いてもらい、支援されていると感じていることをどのように捉えているか、独立部門と公的部門での違いを明らかにした。

「IFP (独立型里親養育提供機関) の回答は、LAs (公的里親養育提供機関) の回答よりも著しく肯定的な回答が多かった。研究に参加した 170 人の IFP 養育者の 70% が、同僚として大切にされていると感じていると述べ、61% が、自分たちの機関が養育者の不安に耳を傾け、対応していると感じていると述べている。」

(2007, p. 8)

また、本研究では、里親が「大切にされ、話を聞いてもらっている」と感じていることが、必ずしも委託の安定性と一致していないことも注目すべき点である。同じ研究から得られたもうひとつの興味深い知見は、独立型里親養育サービスのスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの方が、公的里親養育サービスよりも、「同僚」として里親と協力することに寛容であるように見えたことである。

Hollingsworth ら (2010) は、公的里親養育サービスおよび独立型里親養育サービスにおけるソーシャルワーカーの特徴、態度、信念を比較している。このレビューに関連して、彼らは、独立セクターのソーシャルワーカーが、精神的な病気や薬物やアルコールの乱用に苦しんでいる実親に対して、より否定的な態度を持っていたことを発見した。これらの知見が里親養育にどの程度転用可能であるかは不明である。Hollingsworth らは、これらの知見は、実親家族との交流に対するスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの態度に影響を与える可能性があるため、里親養育で働く人たちをスーパービジョンする際に考慮に入れることを推奨している。

里親の認識

レビュー用に選択された24編の論文(22件の研究)のうち、19編は、里親養育サービス、里子のソーシャルワーカー、およびスーパーバイズ・ソーシャルワーカーによって提供された支援に関する「里親の認識」を中心としたものであった。上述のように、「支援」が何を意味するのかが養育者ごとに大幅に異なる可能性はあるが、スーパービジョンよりも支援が強調されていた。付録A表1に示すように、研究の知見は、大きく異なる研究デザインとサンプルサイズから得られたものである。したがって、知見の転用可能性に関しては、研究によって異なる重みを持つことになる。しかし、地理的な位置、研究の実施時期、研究デザイン、サンプルサイズにかかわらず、一部の知見は顕著に類似していた。里親は、「支援されている」場合、その支援は自分自身だけでなく、養育している子どもや若者にも利益をもたらすと感じている。すなわち、「専門的な支援が信頼でき、予想通りで、反応が良好である場合、里親は自分と養育している若者が多くの恩恵を得ていると感じている。」(Wadeら、2012、p.277)。

感情的な支援

里親であることは難しい役割であり、研究知見から得られた主要なテーマは、その役割を果たすことができるよう、里親が受けた感情的な支援の重要性であった。享受した支援に対する里親の認識に基づいた19編の論文の中では、里親が好意的に評価している重要な側面として、感情的な支援が指摘された。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係は、例えば家族からの支援のように、彼らが感情的な支援を経験するための重要な手段であったようである(Sinclair, Gibbs and Wilson, 2004)。Hudson and Levasseur (2002)は、実践的な支援よりも感情的な支援を重視する里親の方がわずかに多かったと述べている。逆に、他の里親については、感情的な支援を大切にしながらも、傾聴だけでなく行動も望んでいた(Triseliotis, Borland and Hill, 2000)。感情的な支援の欠如は、里親を辞めることに関連する要因のひとつであった(Macgregor, Rodger, Cummings and Leschied, 2006)。興味深いことに、Hudson and Levasseur (2002)の研究では、里親養育サービスは、里親の感情的な支援ニーズを、期待されるほどには満たしていないと考えていた。

実践的な支援

実践的な支援は、感情的な支援とは異なるものの、里親が効果的な支援を構成する2つの要素のうちの1つとして、感情的な支援と並んでしばしば引用されていた。里親の満足度を高めるための実践的な支援の重要性が、多くの論文で示されている(Fisher, Gibbs, Sinclair and Wilson, 2000; Hudson and Levasseur, 2002; Macgregorら、2006)。

利用可能性と信頼性

里親の家庭領域や家族というプライベートな空間の中で、分離やトラウマを経験したことのある里子の世話をする里親の役割の性質を考えれば、里親がソーシャルワーク支援の利用可能性と信頼性を高く評価するのは、あまり驚くべきことではない。支援のこの側面は、レビューを行った多くの論文で取り上げられている(Brown, Moraes and Mayhew, 2005; Cavazzi, Guilfoyle and Sims, 2010; Clarke, 2009; Fisherら、2000; Hudson and Levasseur, 2002; Macgregorら、2006; Taylor and McQuillan, 2014; Sinclairら、2004; Triseliotisら、2000)。ソーシャルワーカーとの直接の交流は好意的に評価されたが、電話での交流も関心の高さが伝わるので評価された(Brownら、2005; Fisherら、2000; Sinclairら、2004)。一方、ある研究では、電話での交流が多すぎることが問題であると感じた里親もいた(Fisherら、2000)。里親は、自分に対して申し立てがあった場合、利用可能で信頼できる支援を特に評価しており、支援の欠如は不満感情を助長していた(Fisherら、2000; Kirtonら、2007; Triseliotisら、2000)。

家庭訪問

多くの里親は電話での交流を評価していたが、里親は依然として家庭訪問が重要であると考えていた(Brown, 2008; Brownら、2005; Hudson and Levasseur, 2002; Kirtonら、2007; Macgregorら、2006;

Sinclair ら、2004 ; Triseliotis ら、2000 ; Wade ら、2012)。訪問の頻度と同様に、期間も里親にとって重要であると指摘する研究がある (Kirton ら、2007)。

交流

里親のストレスの潜在的な領域として、里子の実親家族との交流が示されており (Austerberry ら、2013)、里親が支援を高く評価している領域である。これは検討された論文で明らかになった (Fisher ら、2000 ; Taylor and McQuillan、2014 ; Triseliotis ら、2000)。Taylor and McQuillan (2014) の研究では、里親委託の中断を扱っており、半数以上の里親が中断の一因として里子の実親家族との交流があったと考えており、交流に関連した里親へのスーパービジョンと支援が重要であると考えられる。

危機的場面

里親が危機的場面に支援を受けられることは、研究の中で浮かび上がったテーマであった (Cavazzi ら、2010 ; Hudson and Levasseur、2002 ; Macgregor ら、2006 ; Triseliotis ら、2000)。これは多くの場合、ソーシャルワーカーの利用可能性に関する彼らの認識と関連していた。ある研究では、心理士はソーシャルワーカーよりも優れた危機対応をしていると見られていた (Cavazzi ら、2010)。

レスパイト

里親のためのレスパイト (主要養育者に休息を与えるための、他の養育者による短期的な里親養育) は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが提供するものではないが、通常はスーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里親養育サービスによって手配される。研究に参加した多くの里親は、レスパイトを自分たちが評価する支援の要素であると認識しており、それが里親養育サービスによって提供される支援への認識の違いをもたらしていた。里親が、もっとレスパイトが必要だったと述べた事例もある (Hudson and Levasseur、2002 ; Macgregor ら、2006 ; Triseliotis ら、2000)。

要約

里親養育サービスおよびスーパーバイズ・ソーシャルワーカーに何を求めているかについての里親の認識は、後述するように、彼らの認識が定着に影響を与える可能性があるため、注目すべき重要な点である。里親養育のキープレーヤーとして、彼らの意見を集めることは価値がある。彼らの認識は、里親養育サービスやソーシャルワーカーに、ソーシャルワークの提供における強みや、さらに発展できる分野について情報を提供するものである。同じ研究に基づく2編の論文が、以下のようにソーシャルワーク支援への里親の認識に関する有用な要約を提供している。

「本稿では、里親がソーシャルワーカーに求める資質について述べている。一般に、本サンプルの里親は、文献で確認された知見と一致する見解を持っていた。彼らの目に映る優れたソーシャルワーカーの資質とは、里親がどのようにマネジメントするのかに関心を示し、連絡を取りやすく、連絡を受けたときにはすぐに対応する、有言実行、傾聴して励ましを与える準備ができていて、家族のニーズや状況を考慮している、家族に情報を与えて計画に参加させる、支払いや苦情などが可能な限り早く処理されるようにする、子どもの興味とニーズに配慮する、必要に応じて里親を巻き込む、というものである。」 (Fisher ら、2000、p. 231)

Sinclair らは、以下のように言及している。

「これらの養育者がソーシャルワーカーに求める要件は、単純で理解しやすいものであった。ソーシャルワーカーは、養育者を尊重し、求められた場合は速やかに訪問し、地方自治体とのトラブルを効率的かつ迅速に解決し、子どもと養育者の両方の話を聞き、養育者とともにチームとして働き、約束したことを実行し、良いアドバイスを提供する必要がある。」 (2004、p. 115)。

里子を取り巻くチーム

里親は「チーム」の一員になりたいと考えている (Sinclair ら、2004)。具体的には、養育、意思決定、里子のための計画に責任を持つ専門家のグループ、つまり「子どもを取り巻くチーム」の一員である。里親は日常的に里子と暮らし、里子の世話をしており、ほとんどの場合、関係する他の専門家の誰よりも里子のことをよく知っているため、この点は特に適切であると思われる。「子どもを取り巻くチーム」というテーマは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に直接関係しているようには即座には思われませんが、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親と協力する仕事をどのように概念化し、実行するかに影響を与える。Caw with Sebba (2014) は、養育者が子どもに変化をもたらす主体であるチーム養育モデルについて説明している。子どもを取り巻くチームのメンバーがこの養育者の役割に専心している場合、ソーシャルワーカーの行動を変えられる可能性がある。我々が確認した、このテーマの下にある重要な領域は次のとおりに分類される：

計画と意思決定

多くの研究では、里親が世話をしている里子の計画と意思決定に参加することの重要性を明らかにしている (Brown、2008; Brown ら、2014; Fisher ら、2000; Gleeson and Philbin、1996; Hudson and Levasseur、2002; Kirton ら、2007; Macgregor ら、2006; Rhodes, Orme and Buehler、2001; Wilson, Sinclair and Gibbs、2000)。実際、チームへ参加し、意思決定と計画に参加することが、より困難な委託に対応する里親の意欲に関係していると見られる場合もあった。「里親が児童福祉チームの一員として統合されていると感じている場合、困難な子どもに対処する際、より多くの欲求不満に対処しようとする可能性が高い」(Macgregor ら、2006、p. 364)。里親と里子のための意思決定や計画を立てる人々との間に見解の違いや対立があった場合、里親にとっては特に困難なこととして経験されていた。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割のひとつは、子どものレビューの際に里親に代わってアドボケイト (代弁) することである。里親と里子間のアタッチメントの重要性が強調されているが、里親は、その重要性が意思決定や計画の中であまり注目されていないと考えていた (Cavazzi ら、2010)。

面談のタイミングと手配

多くの研究では、面談のタイミングや場所について相談されなかった場合の里親の不满について言及している。すでに取り決めがなされており、里親がそれに合わせることを求められている場合、このことは里親が里子の養育を担当するチームの中で、キープレーヤーあるいは対等な専門家とは見なされていないというメッセージを与えた (Kirton ら、2007)。

「クライアント」または「同僚」としての里親

いくつかの研究論文で明らかになった議論は、里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが互いをどのように認識しているか、また互いに協働しているかに関連しており、里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親を職業上の同僚として認識しているかどうかという問題であった。里親養育の専門化が進む中で、里親が自分自身を、子どもを取り巻くチームの専門家の仲間であると感じていても、ソーシャルワーカーから同じ見方をされていない場合、協力関係に緊張感が生まれる可能性があった (Hudson and Levasseur、2002; Kirton ら、2007; Sheldon、2004)。この曖昧な関係は、一部の里親がソーシャルワーカーと対等な専門家パートナーとして協力することの難しさの根本的な原因であるように思われた。ある研究では、ソーシャルワーカーは、里親とソーシャルワーカーの関係のスーパーバイズの性質に関連して、彼らのアンビバレントな感情を以下のように明確に述べた。「これについてはよくわかりません。パートナー... そうです。ですが、関係は真の対等なパートナーシップであることはできません」(Sheldon、2004、p. 29)。他にも、「何かがうまくいなくなるまでは大丈夫」(Sheldon、2004、p. 31) というコメントがあるが、これはおそらく、児童保護が他のすべての機能よりも優先されるという事実を反映しているのであろう。Kirton ら (2007) はこの議論を、里親が時代とともにどのように見られてきたか、また歴史的に里親は同僚ではなくしばしば「クライアント」として見られていることに関連した文脈で述べている。Kirton ら (2007) の研究では、独立型里親養育サービス

のスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの方が、自治体の里親養育サービスのソーシャルワーカーよりも、里親を同僚として見ている可能性が高かった。

合同研修

里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの合同研修は、児童ソーシャルワーカーが加わる場合もあるが、パートナーシップを示す上で重要である可能性がある (Kirton ら、2007)。里親に研修を行うことは、一部の里親からも有用であると考えられていた (Macgregor ら、2006)。

信頼

信頼というテーマは、いくつかの研究 (Hudson and Levasseur、2002; Macgregor ら、2006; and Rosenwald and Bronstein、2008) で明らかになったテーマである。里親は自分たちが十分に信頼されていないと感じており、この信頼の欠如は、里子の養育計画を担当するチーム内の専門的な同僚としての関わり方に影響を及ぼしている。里親に対する信頼は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーや里親養育サービスから評価されていると感じていることと密接に関連していた。

評価され、尊重されること

里親にとって、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーや里親養育サービスから評価され、尊重されていると感じることの重要性は、多くの研究で取り上げられている (Hudson and Levasseur、2002; Kirton ら、2007; Rosenwald and Bronstein、2008; Taylor and McQuillan、2014)。注目に値するのは、Kirton ら (2007) の研究における2つの知見である。第一に、独立型里親養育サービスの里親は、地方自治体の里親よりも全体的に評価され、尊重されていると感じていることがわかった。第二に、「評価され、傾聴されていると感じることは、養育者の健康評価と関連していることがわかった」(Kirton ら、2007、p. 8)。これらの知見はいずれも、論文で提供されていない解釈が可能である。例えば、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割は、時には養育者が困難に直面することを尊重する必要があるため、養育者に対する無条件の肯定的な配慮は必要なバランスを反映していない可能性がある。ただし、このことはレビューを行った研究では言及されていないため、結論を出す前にさらなる精査が必要であろう。

里子に関する情報

世話をする可能性のある里子、またはすでに世話をしている里子について、里親に提供される情報は、研究の中で議論の対象となっているようである。里親が与えられた情報が少なすぎると考えている場合は、里親が子どもを取り巻くチームの重要なパートナーとして信用されていないことを連想させる (Cavazzi ら、2010; Clarke、2009; Fisher ら、2000; Kirton ら、2007; Macgregor ら、2006; Rosenwald and Bronstein、2008; Sheldon、2004; Taylor and McQuillan、2014; Triseliotis ら、2000; Wilson ら、2000)。その場合、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの重要な役割は、子どもに関する情報を「仲介」し、その情報を養育者が理解し、解釈できるように助けることであるかもしれない。

コミュニケーション

里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの間の対人コミュニケーションの質は、彼らがどのように協働していくかの有効性に関して決定的な側面であると考えられる。コミュニケーションは多くの研究 (Macgregor ら、2006; Okeke、2003; Rhodes ら、2001; Sheldon、2004; Taylor and McQuillan、2014) で浮かび上がったテーマであった。コミュニケーションが生まれると、里親は子どもを取り巻くチームの一員として評価され、信頼されていると感じ、自分自身とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの間のコミュニケーションの質が良いと感じやすかった。Taylor and McQuillan は、里親、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里子のソーシャルワーカーの間のコミュニケーションに関する知見について次のように書いている。「コミュニケーションに関するデータは概ね肯定的であった。3つの参加者グループの中で、自分たちのコミュニケーションに対する意見が他グループよりもやや高かったのは驚くべきことではない！」(2014、p. 246)。Okeke は、研究の結論として、里親 (ここでは、研究の焦点として

取り上げていた「里母」と呼んでいる)と協力する際に、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの援助関係スキルの重要性を指摘している:「...コミットメント、共感、暖かさを通じて尊敬を伝え、決定的な判断へ急ぐことを回避し、里母の強みを強化する...」(2003、p. 276)。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの親しみやすさ、および里子との協力

多くの研究では、問題を抱えている子どもや問題行動がある子どもを支援する際に、里親が十分な助言や支援を受けられているかどうか問題視されている。一部の里親は十分な支援を受けられなかったと考えている。里親と協働するスーパーバイズ・ソーシャルワーカーと、里子のために働く里子のソーシャルワーカーの明確な役割においては、多くの場合、子どもの行動に焦点を当てるのは里子のソーシャルワーカーとなっている。しかし、先に述べたように、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関する英国政府の指針は、里親が「子どものニーズを満たす」ようにスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが確認することを求めているが、特に里親が子どもの行動を問題視している場合には、里親と里子の両方と関わることなくスーパーバイズ・ソーシャルワーカーがこれをどのようにして行うのかを想像するのは難しい。多くの研究で取り上げられているように、子どもの行動への対応において里親を支援することは、驚くべきことではない(Brownら、2005; Fisherら、2000; Hudson and Levasseur、2002; Kirtonら、2007; Sinclairら、2004; Rhodesら、2001; Taylor and McQuillan、2014)。ある研究では、里子の問題行動に対する里親によるマネジメントについて、里親、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里子のソーシャルワーカーの異なる意見が記録された。里子のソーシャルワーカー(研究ではFSWと呼ばれている)の中には、子どもの行動に対する里親の理解が不足していると考えている人もいた。

「FSWからの主なテーマは、里親が子どもの行動を適切に理解し、対応し、マネジメントするには限界があるとの懸念を表明する意見であった。里親は主に、行動に名前を付けて説明し、子どもと子どもが抱える『問題』については否定的な意見が優勢であった。SSW(スーパーバイズ・ソーシャルワーカー)は、FSWと里親の混在したテーマを示した。彼らはまた、行動に名前を付け、それらが複雑であることを認めた。SSWの中には、里親の行動マネジメントを改善することもできたはずだと考えている人もいた。」
(Taylor and McQuillan、2014、p. 240)

もちろん、里子の行動の管理について、一部の里親が、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーから支援とスーパービジョンを受けていないと考えていたことと、ソーシャルワーカーが、里親が子どもの行動に有益な影響を与えるための理解やスキルが限られていると認識していたこととの間に関連があった可能性はある。しかし、両者の間に明確な関係があることを証明するには、さらなる研究が必要であろう。里親研修の分野では、里親養成プログラムを通じた、里親へのインプットとの関係について、いくつかの初期の知見が肯定的に示されている。プログラムの内容は、子どもの行動の理解、子どもたちの経験が行動にどのように影響するか、子どもの行動を変える手助けをする方法、そして子どもの行動をマネジメントするための里親養育のアプローチの変化などである(Briskmanら、2012; Priceら、2009)。

里親、里子のソーシャルワーカー、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの関係

子どもを取り巻くチームのすべてのメンバー間の効果的な協力関係は、効果的な里親養育に必要な要素と考えられ、それにはスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親に共感し、時には異議を申し立てることも含まれているべきである。里親、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里子のソーシャルワーカーの間の協力関係の質に関する里親の認識を調査した研究では、ほとんどの里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの協力関係が里子のソーシャルワーカーとの協力関係よりも良いと感じていることがわかった(Clarke、2009; Kirtonら、2007; Ramsay、1996; Sinclairら、2004; Wadeら、2012)。Wadeらの研究における重要な知見は、以下の通りである:「SSWによる支援は極めて重要であり、高く評価されていたが、黒人やアジア系の里親は白人の里親に比べて、この役割についてはむしろアンビバレントであるようだった」(Wadeら、2012、p. 277)。Okeke(2003)は、30人のアフリカ系米国人里親のサンプル全体でも、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係についてあまり肯定的ではないと感

じていることを明らかにした。これは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里親の関係について、さらなる調査を必要とする側面であるかもしれない。

Sheldon の研究 (2004) では、里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの間の協力関係にはいくつかの困難があり、その困難はコミュニケーション、役割の明確化、里親が合理的なマネジメントをすることへの期待などの分野に集中していることがわかった。里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの間の効果的な協力関係については、Wade ら (2012) が指摘している。里親の満足度は、養育する里子のソーシャルワーカーと、里親自身のスーパーバイズ・ソーシャルワーカーがうまく協力したときに当然のことながら増加した。全体として、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーにとって、里親と里子のソーシャルワーカーの両方との関係およびそれらの間のダイナミクスをマネジメントすることは、子どものニーズやそのニーズがどのように満たされているかに影響を与えることは言うまでもなく、その役割における緊張感を示している。

ソーシャルワーク教育および研修

ソーシャルワークの教育と研修を通じて、ソーシャルワーカーが里親養育において活動する準備ができているかどうかについては、3件の研究で言及されている (Fisher ら、2000; Hollingsworth ら、2010; Sheldon, 2004)。Fisher らはソーシャルワークの教育と訓練の必要性についても言及し、里親が評価する資質とスキルを強調している。さらに、チームの立ち上げやグループワークに関わる里親支援ソーシャルワークのスキルを有効なものとして開発することは、通常のソーシャルワーク研修には含まれていない。ソーシャルワーカーが里親養育と養子縁組の分野で実践する準備ができているかどうかは、英国の状況において懸念されてきた。その結果、2013年に「永続性の計画と支援に関する継続的専門的能力開発 (CPD) のためのカリキュラム・フレームワーク：家族再統合、家族と友人による養育、長期の里親養育、特別な保護、養子縁組」がソーシャルワークの大学のために開発された (Schofield and Simmonds, 2013 p. 1)。将来的に、ソーシャルワーカーが里親養育分野において活動するための教育や研修を受けていると人々が考えていることに違いが出るかどうかを評価するのは時期尚早である。Chuang ら (2011) は、ソーシャルワーカーが受けた研修を活用できるようにするためには、彼らの組織的文脈が、彼らが学び開発した知識やスキルを育むことに関心を持つ必要があると指摘している。

委託の中断

公的養育の対象の子どもたちの永続性と里親委託の安定性は、何十年にもわたって研究と政策の注目を集めてきたテーマである (Care Inquiry, 2013; Sinclair ら、2005)。本レビューの中の2件の研究では、里親委託の中断に明確に焦点を当てている (Taylor and McQuillan, 2014; Tregeagle ら、2011)。里親養育をやめると決めたことと、委託の中断との間の関連性を明確に述べている里親について、Wilson ら (2000) の研究に示されている。研究の結論として、Fisher ら (2000) はソーシャルワーカーが、心理的混乱が起り得ることについて積極的に関与することの必要性、申し立てがなされたときや委託の中断が生じたときに心理的苦痛を支えることの必要性を述べている。「中断した委託を真摯に注意深く取り扱うこと、つまり、子どもと養育者の気持ちを認めて関与することである」(2000, p. 232)。

Taylor and McQuillan (2014) の研究では、緊急、短期、長期のいずれであるかにかかわらず、中断は予定外の終了と定義されており、里親の半数以上が、里子とその実親家族との交流が中断の一因になっていると考えていることがわかった。したがって、前述のように、交流に関係する里親へのスーパーバイジョンと支援は重要な意味を持つ可能性がある。同じ研究では、「里親の話を聞き、支援すること、里親が中断によって『失敗』したと感じるのではなく、彼らが価値を感じられるようにすることは、すべての参加者グループにとってはっきりとしたテーマである」として、その重要性を述べている (2014, pp. 241-242)。これは、予定外の委託の終了後、里親に不満を感じるスーパーバイズ・ソーシャルワーカーや里親養育サービスにとって重要なメッセージである。同じ研究では、里子のソーシャルワーカー、里親およびスーパーバイズ・ソーシャルワーカーのデータから、提供される支援のレベルにかかわらず、多くの人が里親委託は中断することが多いと考えていることが示された。また、彼らのサンプルでは、

緊急時に行われた委託よりも、計画されていた委託の方が委託中断の数がやや多いこと（これは一般的な常識に反している）、そして、委託中断の可能性が高いのは、最初の1年以内、より具体的には最初の4ヶ月以内であったことが明らかになった。

Taylor and McQuillanの知見のいくつかは、Tregeagleら（2011）の知見とはある程度異なっていた。Tregeagleらの研究では、里親委託の安定性を維持するためのコストを調査し、支援によって、不安定な委託や1年目の委託の安定性に違いをもたらすことを論じた。委託の初年度に集中的な支援を投入することは、Tregeagleらの研究が行われた非政府組織（NGO）サービスでは、安定性を維持するために必要な予防的介入であり、小さな問題が積み重ならないように関係性を構築するために必要なものであると考えられていた。

この組織には、持続性の理論的枠組みの中で定義されたソーシャルワーク支援介入モデルがあった。しかし、理論的な枠組みに基づいた里親の支援とスーパービジョンが、委託の安定性を向上させるかという因果関係はまだ証明されていない。

里親の継続

このレビューの中の多くの研究は、里親にとって里親養育サービスやスーパーバイズ・ソーシャルワーカー、および里子のソーシャルワーカーから受けた支援が適切か不十分かという認識と、里親の継続との間に関連があることを示している（Fisherら、2000；Hudson and Levasseur、2002；Macgregorら、2006；Maclayら、2006；Ramsay、1996；Rhodesら、2001；Sinclairら、2004；Triseliotisら、2000；Wilsonら、2000）。広義の意味での里親への支援の欠如は、里親が里親養育をあきらめる、またはあきらめようとする主な理由であった（Maclayら、2006；Rhodesら、2001）。Rhodesらの研究では、里親養育をやめた、あるいはやめようと考えている里親の約3分の1が、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの協力関係が乏しいことを要因として挙げている。この点は、Fisherらの研究でも再確認された：「私たちの知見は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの良好な関係が、里親養育を続けるかどうかの決定に影響を与えていることを示唆している」（2000、p.232）。しかし、Sinclairら（2004）は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーからの支援が不十分であることと、里親の継続率の悪化との因果関係が描かれることについて以下のように記載している：

「したがって、ソーシャルワーカーとリンクワーカーは、里親制度において非常に重要な要素である。しかし、里親養育へのコミットメント、里親養育を離れる決断、養育者のメンタルヘルスは、養育者が受ける形式的な支援を超えて、様々な影響を受ける。これらのより広範な成果に関して、ソーシャルワーカーは、間違いなく重要な役割を果たしているが、その役割ははるかに小さい。」（2004、p.117）

現在の研究エビデンス基盤のギャップ

このレビューを実施する中で、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関連して、ソーシャルワークと里親養育の実践に情報を提供する既存の研究にいくつかのギャップがあることを確認した。私たちは、里親がソーシャルワーク支援に対してどのように考えているか、何が役立つと感じているかについてかなり多くのことがわかった。しかし、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが何を考えているのか、実際に何をしているのか、また、彼らがしていることが里親や里子を支援するために効果的かどうかについては、まだほとんどわかっていない。これらの介入が、委託の安定性を高め、里子に対する里親養育の質を向上させるかどうかについては、私たちはさらによくわかっていない。したがって、里親支援ソーシャルワークの役割の側面、そしてそれが里親によって、どのように認識されているかについては、いくらか明らかにすることは出来たものの、私たちがこの文献レビューで解決したいと思っていた疑問には十分に答えることができなかった。

このレビューにおける研究の焦点は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのスーパーバイズの役割よりもむしろ、「支援」の要素についてであった。これは、研究のエビデンスの多くが、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーではなく里親を対象としたものであり、現在ではなくレトロスペクティブ（後ろ向

き)な認識に基づいているためであろう。このことは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが支援を行うことと、適切な場合には里親に異義を申し立てることとの間に緊張感が生まれなかったことを意味している。

調査研究のほとんどはレトロスペクティブ（後ろ向き）で記述的な研究であった。スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割の有用性についてのエビデンスを提供するためには、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割のすべての側面と、その役割がどのように実行されているかを調査する、プロスペクティブ（前向き）な研究を行う必要があると私たちは主張する。このような調査研究は、特定の介入モデルと理論的枠組みに基づいた場合に、里親養育サービスとスーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里親と里子の成果に有益な違いをもたらすかどうかを、有効に検討する。Sinclairら（2005）は、委託において里親が子どもの行動をマネジメントすることを支援するには、適切な理論に基づいて情報を与えられる必要があると主張している。このことは、里親や里子を支援し、スーパーバイズする役割を担うスーパーバイズ・ソーシャルワーカーに情報を提供する場合にも当てはまると思われる。

私たちの主張の有効性は、プロスペクティブ（前向き）な方法論を含む調査研究、比較群の使用、およびスーパーバイズ・ソーシャルワーカー自身とその管理者の認識を通じて検証する必要がある。

私たちは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーの間の協力関係をより深く調べ、その協力関係の質が里親の経験、特に申し立ての管理、中断、委託の安定性に関して、違いをもたらすかどうかをより深く調べる必要があることがわかった。

私たちは、2件の研究（Okeke, 2003 ; Wade ら, 2012）において、人種的マイノリティや先住民族の養育者は効果的な支援を受けられていないと感じていることを指摘した。これは健康上の懸念がある里親の場合にも当てはまり（Kirton ら, 2007）、Austerberry ら（2013）でも同様の知見を提示している。これらの知見はさらに調査および精査する価値があるかもしれない。

このレビューは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関する既存の研究エビデンスのギャップについて、可能な限り多くの情報を提供した。一方で、ソーシャルワーカーからの「支援」を里親がどのように受け止めているのか、そしてその支援が里親に違いをもたらしているのか、ということについて詳細な状況を明らかにすることができた。

結論

全体的に里親は、里親養育サービスとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーから提供される支援を好意的に評価している。感情的な支援は、より実践的な要素と並んで高く評価された。彼らは、申し立てや里親委託の中断の場合など、特に重大局面にある場合やストレスのある時に対応可能な、信頼できるソーシャルワーカーを高く評価していた。交流の度合いは、主に里親養育サービス側の関心を示すものとして経験されている。電話連絡だけでなく、家庭訪問も好意的に評価された。里親は、里子と実親家族との課題のある交流に関する支援を高く評価していた。

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが手配したレスパイトは、一部の里親にとっては支援的であると考えられていた。多くの里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの仕事量はその利用可能性に影響を与えていると考えていたが、仕事量に関するデータを報告した研究はなかった。スーパーバイズ・ソーシャルワーカー側の視点を報告する研究は限られていたが、記録、規制、コンプライアンスの増加によって彼らの仕事量のバランスが変化したことは間違いないだろう（例：Sellick, 2013）。

里親とスーパーバイズ・ソーシャルワーカーは、「子どもを取り巻くチーム」の一員として、里子のための計画と意思決定、および里子のケアプランの実現に向けて、委託機関を支えている。里親は、里子に関する決定と計画に参加したいという希望、さらには里親から里子への愛情と里子から里親への愛着は、子どもの将来を計画する際に考慮に入れるべきであると主張した。

里親が専門職ネットワークの中でどのように見られているのか、つまり、里親が同僚として見られているのか、一緒に仕事をしているのか、という点で緊張感が生じている。里親は、彼らを変化の主体とし

て認識するモデルで示唆されているように、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーから信頼され、尊重され、大切にされることを望んでいたが、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーにとっては、そのスーパーバイズの義務を考えると里親との関係における力の不均衡が残存していた。合同研修は、里親をチームに含めるための手段であると考えている人もいた。里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの効果的な対人コミュニケーションを好意的に評価していた。また彼らは、自身への委託が検討されている将来の子どもたちや、現在の里子について、可能な限り多くの情報を望んでいた。里親はまた、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里子を知っていることや、里親が問題行動をマネジメントするのを助けるための助言を好意的に評価した。

このレビューから導き出されるその他の結論は以下の通りである。

- 里親は一般的に、里子のソーシャルワーカーとの協力関係よりも、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの協力関係について、肯定的な見方をしていた。養育者が、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーがうまく連携していると感じた場合、これは有用であると認識された。
- ソーシャルワークの教育と研修においては、家族の委託と体系的な実践をカバーする里親養育を、里子のソーシャルワーカーとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの両方が適切に行うために、里親養育にもっと明確に焦点を当てる必要があると考えられていた。
- 委託の中断には様々な要因があると考えられていた。ある研究では、里親委託への支援は委託の安定性と関連していたが (Tregeagle, Cox, Forbes, Humphreys and O'Neill, 2011)、別の研究では関連していなかった (Taylor and McQuillan, 2014)。
- 独立型里親養育サービスと公的里親養育サービスの間には、いくつかの違いが指摘された。独立型里親養育セクターの里親は、特に十分支援されていると感じていた。
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーのスーパービジョンは、ソーシャルワーカーの態度が意思決定に影響を与えないよう意識するため、彼らの個人的態度について考慮する必要があると報告された。

多くの研究において、里親の維持は、一般に里親が受けた支援、特にスーパーバイズ・ソーシャルワーカーによる支援の質と量に関連していると報告された。

政策と実践のための提言

スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に関する研究エビデンスが限定的であることを考えると、提言は暫定的なものである。

- 里親は、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーとの関係を好意的に評価している。したがって、里親養育サービスは、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが里親と直接的に協働できるための利用可能性を確保するようにケース数の管理を行い、ソーシャルワーカーの効果を高めるようなスーパービジョンを行うべきである。
- 英国における国家最低基準を超える実践ガイダンスには、時に里親との関係に葛藤を抱える側面も含めて、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割への期待を含める必要がある。
- 里親が支援計画において個人的および専門的に成長することにおける、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割の可能性は、さらに認識される必要がある。
- 公的および独立型里親養育サービスは、共同研修などの具体的な活動を通じて、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー、里子のソーシャルワーカー、里親間の協力関係をより強化する方法を検討していく必要がある。
- ソーシャルワークの教育と研修には、里親養育に関連した知識と技術の発展を含める必要がある。

今後の研究のための提言

このレビューでは、上記の既存の研究エビデンスにおけるいくつかのギャップと弱点が確認された。以下のような、さらなる研究を行うことを提言する：

- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの役割に何が含まれるか、ケース数の管理を含むスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの日常業務、そして彼らの里親養育サービス内で、他の機関や専門家に関して、そして里親、里子、里親家族との直接的な仕事において、義務付けられていることは何か、また裁量が残されているのは何かを、特定してマッピングする。
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの視点を含める。
- 里親および里子に対するスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの介入の有効性を、特に委託の安定性と里親養育経験の質に関連して検討する。
- 特定の介入モデルと理論的枠組みに基づいた場合に、里親養育サービスとスーパーバイズ・ソーシャルワーカーが、里親と里子の成果に有益な違いをもたらすかどうかを、比較グループによるプロスペクティブ（前向き）研究デザインを用いて検証する。
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーと里子のソーシャルワーカーの間の協力関係の質を調査し、特に申し立ての管理、委託の中断、委託の安定性に関して、彼らの関係におけるどの側面が、里親と里子の経験に違いをもたらすかを明らかにする。
- スーパーバイズ・ソーシャルワーカーの支援とスーパービジョンの有用性に関して、人種的マイノリティや先住民族の里親、健康上の問題を抱えた里親、および彼らのスーパーバイズ・ソーシャルワーカーの経験と認識に注目する。

リースセンター（Rees Centre）は、強固で有用かつ時宜にかなった調査を提供することに尽力していきます。本レビューの知見について幅広い利害関係者と相談し、これらの提言をどのように進めていくか検討していく予定です。皆様のコメントをお待ちしております。

Helen Cosis Brown（ヘレン・コージス・ブラウン）

University of Bedfordshire

Judy Sebba（ジュディ・セバ）

責任者

Nikki Luke（ニッキ・ルーク）

研究員

Rees Centre for Research for Research in Fostering and Education（リース里親養育および教育研究センター）

rees.centre@education.ox.ac.uk

参考文献

- Aldgate, J. and Bradley, M. (1999). *Supporting families through short-term fostering*, London: The Stationery Office.
- Austerberry, H., Stanley, N., Larkins, C., Ridley, J., Farrelly, N., Manthorpe, J. and Hussein, S. (2013). *Foster carers and family contact: Foster carers' views of socialwork support*, *Adoption and Fostering*, 37(2), pp.116-129.
- Berridge, D. (1997). *Foster care: A research review*, London: The Stationary Office.
- Biehal, N., Dixon, J., Parry, E. and Sinclair, I., Green, J., Roberts, C., Kay, C., Rothwell, J. Kapadia, D. and Roby, A. (2012). *The care placement evaluation (CaPE) evaluation of multidimensional treatment foster care for adolescents (MTFC-A)*, London: Department of Education. Available at: https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/249856/DFE-RR194.pdf (Accessed 8 July 2014).
- Biehal, N., Ellison, S., Baker, C. and Sinclair, I. (2010). *Belonging and permanence: Outcomes in long-term foster care and adoption*, London: British Agencies for Adoption and Fostering.
- Briskman, J., Castle, J., Blackeby, K., Bengo, C., Slack, K., Stebbens, C., Leaver, W. and Scott, S. (2012). *Randomised controlled trial of the Fostering Changes programme*, London: National Academy for Parenting Research, King's College London/Department of Education.
- Brown, H. C. (2014). *Social work and foster care*, London: Sage/Learning Matters.
- Brown, J. D. (2008). *Foster parents' perceptions of factors needed for successful foster placements*, *Journal of Children and Family Studies*, 17(4), pp.538-554.
- Brown, J. D., Moraes, S. and Mayhew, J. (2005). *Service needs of foster families with children who have disabilities*, *Journal of Child and Family Studies*, 14(3), pp.417-429.
- Brown, J. D., Rodgers, J. and Anderson, L. (2014). *Roles of foster parent resource workers*, *Journal of Child and Family Studies*. DOI 10.1007/s10826-014-9959-7 (Advance online publication).
- Care Inquiry (2013). *Making not breaking: Building relationships for our most vulnerable children*, London: The Fostering Network.
- Cavazzi, T., Guilfoyle, A. and Sims, M. (2010). *A phenomenological study of foster caregivers' experiences of formal and informal support*, *Illinois Child Welfare*, 5(1) pp.125-141.
- Caw, J. with Sebba, J. (2014). *Team parenting for children in foster care*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- Chipungu, S. S. and Bent-Goodley, T. B. (2004). *Meeting the challenges of contemporary foster care*, *Future of Children*, 14(1), pp.75-93.
- Chuang, E., Wells, R., Green, S. and Reiter, K. (2011). *Performance-based contracting and the moderating influence of caseworker role overload on service provision in child welfare*, *Administration in Social Work*, 35(5), pp.453-474.
- Claiborne, N., Auerbach, C., Lawrence, C., Liu, J., McGowna, B.G. Fernandes, G. and Magnano, J. (2011). *Child welfare agency climate influence on worker commitment*, *Children and Youth Services Review*, 33(11), pp.2096-2102.
- Clarke, H. (2009). *Getting the support they need: Findings of a survey of foster carers in the UK*, London: The Fostering Network.
- Collis, A. (1999). *Supporting foster carers*, in A. Wheal, (Ed), *The RHP companion to foster care*, Lyme Regis: Russell House Publishing.
- Cox, M. E., Buehler, C. and Orme, J. G. (2002). *Recruitment and foster family service*, *Journal of Sociology and Social Welfare*, 29(3), pp.151-177.

- Department for Education (2011). *Fostering services: National Minimum Standards*, London: DfE.
- Farmer, E., Moyers, S. and Lipscombe, J. (2004). *Fostering adolescents*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- Fisher, T., Gibbs, I., Sinclair, I. and Wilson, K. (2000). *Sharing the care: The qualities sought of social workers by foster carers*, *Child and Family Social Work*, 5(3), pp.225-233.
- Fulcher, L. C. and McGladdery, S. (2011). *Re-examining social work roles and tasks with foster care*, *Child and Youth Services*, 32(1), pp.19-38.
- Gleeson, J. P. and Philbin, C. M. (1996). *Preparing case workers for practice in kinship foster care: The supervisor's dilemma*, *The Clinical Supervisor*, 14(1), pp.19-34.
- Green, J., Biehal, N., Roberts, C., Dixon, J., Kay, C., Parry, E., Rothwell, J., Roby, A., Kapadia, D., Scott, S. and Sinclair, I. (2014). *Multidimensional treatment foster care for adolescents in English care: Randomised trial and observational cohort evaluation*, *British Journal of Psychiatry*, 204, 1-8. doi: 10.1192/bjp.bp.113.131466 (Advance online publication).
- H. M. Government (2011). *The Children Act 1989 guidance and regulations, Volume 4: Fostering services*, London: Department of Education.
- Hawkins, P. and Shohet, R. (2012). *Supervision in the helping professions*, (4th edition), Milton Keynes: Open University Press.
- Hollingsworth, L. D., Bybee, D., Johnson, E. I. and Swick, D. C. (2010). *A comparison of caseworker characteristics in public and private foster care agencies*, *Children and Youth Services Review*, 32(4), pp.578-584.
- Hudson, P. and Levasseur, K. (2002). *Supporting foster parents: Caring voices*, *Child Welfare*, 81(6), pp.853-877.
- Kirton, D., Beecham, J. and Ogilvie, K. (2007). *Still the poor relations? Perspectives on valuing and listening to foster carers*, *Adoption and Fostering*, 31(3), pp.6-17.
- Lawson, D. (2011). *A foster care handbook for supervising social workers (England)*, London: the Fostering Network.
- Macgregor, T.E., Rodger, S. Cummings, A.L. and Leschied, A.W. (2006). *The needs of foster parents: A qualitative study of motivation, support, and retention*, *Qualitative Social Work* 5(3), pp.351-368.
- Maclay, F., Bunce, M. and Purves, D. G. (2006). *Surviving the system as a foster carer*, *Adoption and Fostering*, 30(1), pp.29-38.
- McSherry, D., Malet, M. F. and Weatherall, K. (2013). *Comparing long-term placements for young children in care: The care pathways and outcome study – Northern Ireland*, London: British Agencies for Adoption and Fostering.
- Okeke, T. C., (2003). *Foster mothers' experiences and perceptions of their relationships with caseworkers*, Chicago: Unpublished PhD dissertation.
- Pithouse, A., Young, C. and Butler, I. (2002). *Training foster carers in challenging behaviour: A case study in disappointment*, *Child and Family Social Work*, 7(3), pp.203-214.
- Price, J. P., Chamberlain, P., Landsverk, J. and Reid, J. (2009). *KEEP foster-parent training intervention: Model description and effectiveness*, *Child and Family Social Work*, 14(2), pp.233-242.
- Ramsay, D. (1996). *Recruiting and retaining foster carers: Implications of a professional service in Fife*, *Adoption and Fostering*, 20(1), pp.42-46.
- Rhodes, K. W., Orme, J. G. and Buehler, C. (2001). *A comparison of family foster parents who quit, consider quitting, and plan to continue fostering*, *Social Service Review*, 75(1), pp.84-114.
- Rosenwald, M. and Bronstein, L. (2008). *Foster parents speak: Preferred characteristics of foster children and experiences in the role of foster parent*, *Journal of Family Social Work*, 11(3), pp.287-302.
- Rowe, J., Cain, H., Hundleby, M. and Keane, A. (1984). *Long-term foster care*, London: Batsford Academic and Educational/British Agencies for Adoption and Fostering.

- Schofield, G. and Simmonds, J. (2013). *Curriculum framework for continuing professional development (CPD) on Planning and supporting permanence: Reunification, family and friends care, long-term foster care, special guardianship and adoption*, The College of Social Work – CPD Guide on Planning and Supporting Permanence, London: The College of Social Work.
- Schofield, G. and Ward, E. with Warman, A., Simmonds, J. and Butler, J. (2008) *Permanence in foster carer*, London: British Agencies for Adoption and Fostering.
- Sebba, J. (2012). *Why do people become foster carers?* Oxford: Rees Centre.
- Sellick, C. (1999). *The role of social workers in supporting and developing the work of foster carers*, in M. Hill (Ed) *Signposts in fostering: Policy, practice and research issues*, London: British Agencies for Adoption and Fostering, pp.239-249.
- Sellick, C. (2013). *Foster-care commissioning in an age of austerity: The experiences and views of the independent provider sector in one English region*, *British Journal of Social Work*, 1-17. doi: 10.1093/bjsw/bct046 (Advance online publication).
- Sellick, C., Thoburn, J. and Philpot, T. (2004). *What works in adoption and foster care?* Barking: Barnardo's.
- Sheldon, J. (2004). "We need to talk": *A study of working relationships between field social workers and fostering link social workers in Northern Ireland*, *Child Care in Practice*, 10(1), pp.20-38.
- Sinclair, I. (2005). *Fostering now: Messages from research*, London: Jessica Kingsley Publishers.
- Sinclair, I., Gibbs, I. and Wilson, K. (2004). *Foster carers: Why they stay and why they leave*, London: Jessica Kingsley Publications.
- Sinclair, I., Wilson, K. and Gibbs, I. (2005). *Foster placements: Why they succeed and why they fail*, London: Jessica Kingsley Publications.
- Taylor, B. J. and McQuillan, K. (2014). *Perspectives of foster parents and social workers on foster placement disruption*, *Child Care in Practice*, 20(2), pp. 232–249.
- Tregeagle, S., Cox, E., Forbes, C., Humphreys, C. and O'Neill, C. (2011). *Worker time and the cost of stability*, *Children and Youth Services Review*, 33(7), pp.1149-1158.
- Triseliotis, J., Borland, M. and Hill, M. (2000). *Delivering foster care*, London: British Agencies for Adoption and Fostering.
- Triseliotis, J., Sellick, C. and Short, R. (1995), *Foster care: Theory and practice*, London: B. T. Batsford Ltd/British Agencies for Adoption and Fostering.
- Wade, J., Sirriyeh, A. Kohli, R. and Simmonds, J. (2012). *Fostering unaccompanied asylum-seeking young people: Creating a family life across a 'world of difference'*, London: British Association for Adoption and Fostering.
- Wilson, K., Sinclair, I. and Gibbs, I. (2000). *The trouble with foster care: The impact of stressful 'events' on foster carers*, *British Journal of Social Work*, 30(2), pp.193-209. Wilson, K., Sinclair, I., Taylor, C., Pithouse, A. and
- Sellick, C. (2004). *Fostering success: An exploration of the research literature in foster care*. Knowledge review 5, London: Social Care Institute for Excellence/Bristol:Policy Press.
- Wires, E. M. (1954). *Some factors in the worker-foster parent relationship*, *Child Welfare*, 33, pp.8-9.
- Wonnacott, J. (2012). *Mastering social work supervision*, London: Jessica Kingsley Publishers.

付録 A

表1：レビューに含まれる研究の詳細

| 引用 | 国 | 参加者数 | 方法論 |
|---|---------|--|--------------------|
| Brown, Moraes and Mayhew (2005) | カナダ | 里親 44 人 | 面接 |
| Brown (2008) | カナダ | 里親 63 人 | 面接 |
| Brown, Rodgers and Anderson (2014) | カナダ | 里親家庭リソースワーカー68 人 | グループ面接 |
| Cavazzi, Guilfoyle and Sims (2010) | オーストラリア | 里親 7 人 | 面接 |
| Chuang, Wells, Green and Reiter (2011) | 米国 | 里親、ケースワーカー、里子 92 人 | 面接 |
| Clarke (2009) | 英国 | 里親 442 人 | オンライン調査 |
| Fisher, Gibbs, Sinclair and Wilson (2000) | 英国 | 里親 994 人 | アンケート |
| Gleeson and Philbin (1996) | 米国 | スーパーバイズ・ソーシャルワーカー8 人、里親養育プログラム責任者 3 人 | 面接 |
| Hollingsworth, Bybee, Johnson and Swicke (2010) | 米国 | ケースワーカー82 人 | 面接 |
| Hudson and Levasseur (2002) | 米国 | 里親 66 人、ケースワーカー10 人 | アンケートと面接 |
| Kirton, Beecham and Ogilvie (2007) | 英国 | 里親 1,181 人 (アンケート)、里親養育サービス管理者 21 人 (面接)、里親 139 人 (フォーカスグループ)、ソーシャルワーカー124 人 (フォーカスグループ) | アンケート、フォーカスグループ、面接 |
| Macgregor, Rodger, Cummings and Leschied (2006) | カナダ | 里親 54 人 | フォーカスグループ |
| Maclay, Bunce and Purves (2006) | 英国 | 里親 9 人 | 面接 |
| Okeke (2003) | 米国 | 里親 30 人 | フォーカスグループ、面接、参加者観察 |
| Ramsay (1996) | 英国 | 里親 72 人 | アンケート |
| Rhodes, Orme and Buehler (2001) | 米国 | 元里親 265 人、現里親 252 人 | アンケート、面接 |
| Rosenwald and Bronstein (2008) | 米国 | 里親 13 人 | フォーカスグループ |
| Sheldone (2004) | 英国 | 里子のソーシャルワーカー49 人 (アンケート)、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー10 人 (アンケート)、里子の | アンケート、面接 |

| | | | |
|--|---------|--|------------|
| | | ソーシャルワーカー9人（面接）、スーパーバイズ・ソーシャルワーカー4人（面接） | |
| Sinclair, Gibbs and Wilson (2004) | 英国 | 里親 1,528 人（国勢調査）、里親 994 人（アンケート） | アンケート、国勢調査 |
| Taylor and McQuillan (2014) | 英国 | サービス評価 - 里親、里子のソーシャルワーカー、スーパーバイズ・ソーシャルワーカーが関与した 36 件の里親委託の中断 | アンケート |
| Tregeagle, Cox, Forbes, Humphreys and O' Neill (2011) | オーストラリア | 里親委託 27 件を支援するソーシャルワーカー | 日報 |
| Triseliotis, Borland and Hill (2000) | 英国 | 里親 822 人（アンケート）、里親 67 人（面接） | アンケート、面接 |

| | | | |
|--|----|--|--------------|
| Wade, Sirriyeh, Kohli and Simmonds (2012) | 英国 | 単身の青少年 2,113 人（国勢調査）、里親 113 人（郵便調査）、里親 23 人（面接）、青少年 21 人（面接） | 国勢調査、郵便調査、面接 |
| Wilson, Sinclair and Gibbs (2000) | 英国 | 里親 950 人 | アンケート |

早稲田大学大学院総合研究機構
社会的養育研究所
監訳チーム
担当：中村豪志（早稲田大学社会的養育研究所）
2023（令和5）年 3 月

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION